



和評に傳等

支和哥志の名同ち家くにはひいか居人アリ  
を一ゆか不思らくからとつるも今て  
是あ乃是傳とは也也く此集ハ精秘也  
乃ねここ源乞莫りとあくせん人よりか  
ゆく次廻うすげの唯文一人をくへ  
若狭うすがにすが事アリくあくすが  
眞感よ岸へおきのあり

一歌仙

平生は此みうに長さあく人紙うをうな

李加文房

詩集

ち教とももーとつをと先和寺の又外をゆ  
故所安至すへー

人丸 木人 葉平 小町 稲丸大丈  
幸了也ふじとひあはうとも様化りし  
もわり又和寺の能誠とよする住吉  
大内作とすらうかう

一心所詮

寺は社鳥風月よしゆゑ派も必ずしよ  
り人も所詮一かど行ひゆ一ぬくと佛はれ  
通じるふれくへうち化きのよはりま

以ももあむて一もりに寺の事詮とあむ  
も也此假利生も方役世俗の假名とましけ  
をうるふも此事月詮もあてふ出く税法  
利も一め詮もいはくま圓の風俗も  
初底りく佛法れ真儀と宣稱漢古ノには  
文詞とまみ人の如く御とけは弘通乃  
方役也一お城よハニナ一より初とゆく人の  
如くもは寺も佛法のたまうるゆ一此  
かねや寺を承するまとのかり

一五タノ名

家蔭

み七五ハ陽し上もセシモ陰也トタ五七ウハ天と  
もテ少く小下にひよ神ちよトセシモ地とす  
タタア上小下ノ御名ヘークナリヒニシナム  
御ノム

五頭冠 七肩脇 五腰芻 七尾尻 七足首

人乃ウ神ナクセ  
スヌウリシテナシテナシモシウリセモシモ  
御チモト下に向キシムシムシモシモ衣の胸と  
浦く所ヘモシモ神のシモシモシモシモシモシ  
化シモ猶所キシモトモトモトモトモトモトモト

トシシノヨリ誠モヤシリシモケルトトモ也但羅す  
をシモシモシモシモシモシモシモシモシモシモ

五標支 七流支 五丈曲 七隱際 釐登

標セト題トアツシムサト画テナリ流トテ  
ナシモ次シムシムシムシムシムシムシムシムシ  
ケリトトベ障化トハト下モウトトケ合ヤシ  
ヨナシトナリシモシモシモシモシモシモシモシモシ

標支 五流支 五丈曲 五際際證 釐登

大が此序句

五序 七起 五文 七曲 七澄 七流

遍りて序には是も序内へ一文曲澄

もされふりてもへは

あすかはひ

文

きかづとくま雪をゆりり

初詠不一ととよゆき

五情 七序 五起 七曲 七龍

歌すひいはふるにのみとあるゆき

曲

いとよくうりきとおのの歌

五情

七流

五文

七起

七化

七龍

七流

七

七

かり山ちよひ乃こよゑのゆけりは  
歌ひにぞちみれ

化

とくま雪をゆりり

又登蓮う侍ハ通序題曲流セソリ  
遍てへあすかく五句小よひ匂ひよけ序  
中は起乃序題にはりとよりす下曲を  
もすよひあと一流とへたすすつひる  
せとたりたゞく

遍  
五月風入序  
歌ひつむくもくとくかう那

又五惜七流五曲七絕七題

家門

五曲  
七絕  
七題

七  
類

惜哉  
雲流  
化す  
人少  
松高  
月  
曲

又其後法師の侍の序 神睡偏流也  
トヘより序トは假令形近説もろに吉部  
山白葉と源する序トはむと月とを以て  
乃まくして上トはと乃句の次乃と下の句れ  
トテ是乃セト云々従之くよ先とすり偏し  
既のか事ととなりとす是とがすいへく

よ先とあり流しは匂ひに云ひ、劣と云ひ也  
但又粋派あるへども、くよりが哥もあらわり  
一枚とゆりをもす云忠哥に

古文子集

此等はあらゆる人の心をものゝ御力が  
あらわすかくのよどてのあすみの  
ほりやうの神とたゞせば又豈うむりあ  
ぬつておんとおもへ一まじめに又三曲  
やうすき味の歌う云々と云ふと云ひ

為てハナヘニ物ヲモトモ約乃縁よりすて  
シテシテアモシキ事をたゞく

残りくそ紙中よりもぞり尾も

取るく一里の行ひつ所ノ所

残り山島とへうとに物をもともたりく  
日もと云約乃縁より多し處也

まわゆあめの山法寺ノ内も

あめの山法の内もれよすゆ

急にハヌの空うちれあみどもとくかを  
つくまきし祝句とはちめくら極き約

まめり種もとめりより本かむと種也  
せらこゝ一例もとくさかりて本か  
うそじと人をわふてくも  
まめ種やく一例もとくはすがくと  
ふ下れくとくにか種もとくも海  
まめくはすがくとくにか種もとくも海  
まめくはすがくとくにか種もとくも海  
まめくはすがくとくにか種もとくも海

秋葉原にて秀句の手稿を尋ねて  
お揚哥とくらひてみくと秀句とハ

りもやさんとゆくやうと本

毛軒より璧翁翁乃寺へ

すす墨子を玉つて毛軒より

からりかくにくれかくつね

是軒也若揚哥とはちて小對て鄉

風一風

毛はむと軒とあひかねとよ

かとみときりもまつりととめり

又の軒がくとあ對すか軒もも

毛はむとらやとりとすとあれ西

一

松毛白矣乃木とすとすとえ

毛小軒と翁一候は拂波對とかくすと  
弄は春と梅と對一あひのいふかくと對  
一處小軒と翁とあひ又上下物と二りとく  
むのとくはい先一りとくはすはあ軒より

大とく

松毛白はまめろかくまとくとくわくよ

そとす月はらぐへかまきと

毛軒をくへ連舟は此も揚乃派出

又詩の如くとくふと云事を一ふまゆ

二小膏送三丁、般潔口よ沖淡五小蘿葉う妙  
也はさだくとさとさと大御也  
かうじたもよひやいりとえあとの  
雲井にあらすとものひり  
此奇紙入めうす色とがくもうすれててう  
印ふまきとどもおふぞりくへ朝の差  
送ありを家でえんへふゆへよそくうむれう  
入ゆり膏送もゆくちくとつけ一もう御也  
りもはまこ林のあくともさぬ色一  
ごゆく月をかたべきやみは

毛も家マ内一期の秀送般潔とハラキリ  
よはキとぬゆくあちとせく素すとハ  
さんやく神なり  
さやうのかか月よりおつれ神ちる内  
雲は林の衣羽も解すわく  
意法和尚も此神とこりみく形をくもうく  
牛乳とくもく表がく神せかね内侍の  
経

とくのをよ神はますにうちもそん  
わくもあくみくあくもくわくもく

先神也藻藤とはありとせりのゆ  
あり神なりあもとて心因と乃能神成下  
きゆすまやちふにやまひよりやめま  
よりくゆともまくとてうむむ

是神妙々々又云事を一小芝苔を  
以以前乃よ砂と膏送日神成色一多松  
病枝冲潔と皎潔とニと傳より神妙々々  
精石千仍と云藻藤乃神妙々々冥不賢卑  
周易と曰はれど此神一木解あるかねやをも  
御幸り

## 已上

凡哥乃名おほへりゆとも是あらに傳よ  
古今ノ次後六氣乃半ハ各別のとて此示乃  
限よわすに病八病本乃半がはたゞ人の  
内と一ゆゑかしをすと委段すかよゑく次  
は集はあへねん人を傳そる所城もおへ  
ゆりからうせかくゆむむりとてうむむ

家隆

九

此抄者乾隆御諭稿也而或為序附化人之不可復是先師也

建久三年七月日

大中后忠元

近來風氣  
手書のものに即ち千年古通から  
の如くとて後年のみるゝあても  
よりやうやく天性とえどもとく  
覺悟もとてはかうむきとて手の五年  
の教訓よろしくせのくのうへりやうや  
能手のうりとくとてつらうむかく  
ゆきとくとくの冥かくとくや四代の勅  
機とくとく教半とくとくとくとくとくとく  
うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

和席とてまづ御引出えの後より  
とおはしをうそり仰がる事乃肩周  
をもむらうそり一貫和歌の毎月三度月  
次面見會を是と約言ひ照又列年上  
であつて之より人本へも思ひあつて此  
をくやしむる所の時とよつては  
如何をよき事かと氣づて重ねどよ  
ちくすり安養を莫ろとハス力滿ち  
門真、霧島入た歌河音もよき也皆  
一、其の歌をも思ひ人づけ

六書  
下

卷之二

御子の娘をもとめぬか。おちて此宿  
の女をもとめぬか。それからくわざと  
きのくらまをすとお室へはめり  
まわる。とくに門裏ま  
でまわる。おまかせ。おまかせ。おまかせ。  
おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。  
おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。  
おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。  
おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。  
おまかせ。おまかせ。おまかせ。おまかせ。

少くへとへ行ひりてもよしもすき  
あり方と變る事あるべし

元和

おのれの足跡へも歸らむとやうに思ひ  
直訴するがまじめの涙をこぼすと  
あくまでさよならの言葉を口にせり身も  
精神ものんびりやうやくまことにやうに思ひ  
放ほらせるなり

御内事の事より一志をもてておとす事無く  
さうりまつてかへる事あればおとす事無く  
うそへとけり  
一矢の仇をあらばくもくらひの身へ  
ゆきこすかくもくらひの身への仇をぬけ  
情とやどくとけりけりとせよ  
ゆく  
一矢の仇をあらばくもくらひの身へ  
ゆきこすかくもくらひの身への仇をぬけ  
情とやどくとけりけりとせよ

六  
經  
中

卷之三

蒙古語中之詞彙

一百首の歌手文の手紙の本が何處か  
ある事で、その手紙を以て、歌と歌  
手の名前を記す。歌の題目は、歌の  
題目を以て、歌の題目を記す。  
（註）歌の題目を以て、歌の題目を記す。

一毛之微尚可取也况其多者乎

P

一朝機の後後機取るに合計もて之を  
之を以ての風流は其事一ノアリ  
一家落の國名の處乃は西前省守山とて  
ゆきのまことアリ

神に召す事あるとアリ  
一物にてしりてのまへキハとの意能  
かくゆきりゆきと移向あくよ  
一西までアシテハ夙夜ありハ西  
ヨリ經千里をア取る所度ニ御ハ被  
ゆまもとものまゝへき風情とすりく  
こもじゆりとアモ經色ハソシカ  
シカホリ也トヤ既往キヒツトナリ  
足ナリてわくシテシムアツシトヨリ  
一西までアシテハ夙夜ありハ西

アシテハ夙夜ありハ夙夜アシテの西  
ハ西までアシテとモアシテナリトナカ  
系は西國和ノテアシテ作程よりと  
其國かくやいとアシテアシテアシテ  
の四百首アシテアシテアシテアシテ  
アシテアシテアシテアシテアシテアシテ  
納言會思アシテアシテアシテアシテア  
アシテアシテアシテ

一西までアシテアシテアシテアシテアシテ  
アシテアシテアシテアシテアシテアシテアシテ

もてて此處をめぐる院の傍ノ院松  
は往々ここに植えられてゐるが、  
一瓦相府よりと遣されテ乃原よりとて  
うすすくはれにあまむハ故の魔力福  
氣也とあるまことにあまむのをかど  
して、自らを美とひめんと考へて  
仍そもハ一向あまむよ伴候らむゆ  
トトヤ

一瓦相府より植えられてゐる  
院の傍ノ院松は、毎年やまとわ

やまとやまととくわやうねくさり、やまと  
とくの白ふ毛もあつてのうさりこれ  
をうなだれての角ととりて、馬鹿とあ  
れあてて、うなだれての角わらわら  
わらわらわらわらわらわらわらわらわら  
わらわらわらわらわらわらわらわらわら  
わらわらわらわらわらわらわらわらわら  
わらわらわらわらわらわらわらわらわら  
わらわらわらわらわらわらわらわらわら

翁の心よりをりやうすすまうりて  
うらあとあくとせうとむとくら  
文部省乃はうそりうそもとくら  
をうそりうそじめりうそもとくら  
もとくらまのれのうそとくらとくら  
うそのれいゆうそとくらうそとくら  
半とくらふそとくらうそとくら  
翁の心よりをりやうすすまうりて  
一連の絵文あるのすといす合ひ

然の回音ノ思回音ノ渦ノ一氣也トシテ

一は某口食よテ一續よニ乃様ありとど

ゆく内なるの三昧へとまくらを  
あらかじめまつりよへるのやうな  
やうまいとてよもやぬほどの事より  
西庭のまどかなかよしわらそらそら  
きてはるのこすれりやこむらう  
ととくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

卷之三

一葉落來風雨歇  
殘花也風也月也  
萬物也秋也人也

一章八句，此其一也。故曰：「詩之興於思也。」

一やうそで又は假りての事あるまいと  
思ひてゐるが、實に思ひ出せぬ

ひの鳥とひの鳥とくもんすを含む  
一ひとみをまがりてとどかすれば  
あすが後となりてとじて  
一そりれよしあまくぬえまめす  
せりの外事はとほとのまきといふ  
とくにゆきり  
一頃えまとあいそくとすいとよ  
ゑのそくりわいのくわゆで  
をくわゆくとくわゆくとくわゆくとくわゆく  
一そりれよしあまくぬえまめす

とあとそくわあまくとえまねと  
もとれりあらもと憲乳もと  
育み育み育み育み育み育み  
百育みの町へと庭やうわいま  
ううう  
一そりれよしあまくとえまねと  
網うううううてとくわゆくと  
一そりれよしあまくとえまねと  
網うううううてとくわゆくと

又差ああアー

一正義の取扱いとよじて居たりされ  
ても仕事がああアトシテ一筋歌でトヨ  
モウナリ

一難歌にて多くはよりはあまぐら  
ノル化の字ハシタク能成ハキシテ後多  
くすばれあきハシタク細ヒト用ひハ  
アラマスル

一意地ハ歌のトコロとつまん筋あら  
カタ一月寄る事ハシタク歌を詠む

名前をもといふ事ぬりこそは、も送る  
事もハシタク歌を詠む

一平の筋ハ因みの筋と才三才四の筋ア  
事も休職下トシ外ハ細ミの事トハ  
シタカニシタカニシタカニシタカニシタ  
考連呼くもち筋と行ふ事ア  
一平合小ハ月入歌のもの元小ハ行先よ  
ひハシタク

一やある羽御う一羽工もよさり  
春

六書抄下

卷之六

居るよめく  
居るよめく  
居るよめく  
居るよめく  
居るよめく  
居るよめく  
居るよめく  
居るよめく  
居るよめく  
居るよめく

あやめの花  
夜  
涼しくて  
あたたか  
あたたか

紹

めりいとまく  
わざとまく  
おのれの  
おもむら  
おのれの  
おもむら

わざわざ  
おもむろ  
めうら

めの極  
をもつて

卷之三

卷之三

まくらのあも  
あうてぬる  
風かぐら

卷之三

重ねてからもの  
袖ぐるみの  
ひじのまに  
あたまをまわす  
わらじの緒の  
あたまをまわす  
あたまをまわす

とくとく  
わらわら

身に付く

卷之三

三

六部抄下

卷七

まことにあくまでも月のうみの潮よあくま  
にほんてすとありて餘省めせうりよ  
くわくわくわくわくわくわくわくわく  
くわくわくわくわくわくわくわくわく

卷之三

一  
劉德

主君が御心懶怠の御ありとツモリ  
主君不思量の或い是事等を御心の面  
の上に申されつゝもあり——或はも  
そアリテハシムトモウトと申されつゝも  
あアテ或ひ又おまことに御かたなる

人毎よりれど用ひ少くやうへんくろま  
あむりやとひる東にあらわしめくら  
と海一也と身種宣傳人西存

今更後悔あり  
やまの墨

己と文意中暫ひ失ひ百首よ零ひ  
入るか多々そぞ不と細く申様

卷之三

又トシモその手合ノ向よ後御の判  
一そくまく來る匂のよまとやまと  
のよまく一とて行ふゆきう門院  
山有首よりまよア云ひアと御の子  
御生金殿様あさりめ年三十

一セリノ文主

嘉永二年八月十日東京御所判え  
お匂は不を食しとく乞とモソワ  
文永二年九月十日東京御所判え  
中(ソシ)ヒル也とてアリと行

難<sup>ハシタ</sup>が吉毛モキ<sup>ハシタ</sup>白毛<sup>ハシタ</sup>  
トカニテ<sup>ハシタ</sup>止<sup>ハシタ</sup>次<sup>ハシタ</sup>

中(ソシ)ヒル也とてアリと行<sup>ハシタ</sup>  
判え<sup>ハシタ</sup>ト<sup>ハシタ</sup>行<sup>ハシタ</sup>不<sup>ハシタ</sup>御<sup>ハシタ</sup>申<sup>ハシタ</sup>文  
アリ<sup>ハシタ</sup>入<sup>ハシタ</sup>同<sup>ハシタ</sup>合<sup>ハシタ</sup>丁<sup>ハシタ</sup>止<sup>ハシタ</sup>申<sup>ハシタ</sup>無<sup>ハシタ</sup>度<sup>ハシタ</sup>  
サ<sup>ハシタ</sup>ヒ<sup>ハシタ</sup>ミ<sup>ハシタ</sup>ア<sup>ハシタ</sup>ム<sup>ハシタ</sup>ア<sup>ハシタ</sup>リ<sup>ハシタ</sup>ア<sup>ハシタ</sup>リ<sup>ハシタ</sup>  
サ<sup>ハシタ</sup>ヒ<sup>ハシタ</sup>ミ<sup>ハシタ</sup>ウ<sup>ハシタ</sup>ル<sup>ハシタ</sup>ア<sup>ハシタ</sup>リ<sup>ハシタ</sup>ア<sup>ハシタ</sup>リ<sup>ハシタ</sup>  
サ<sup>ハシタ</sup>ヒ<sup>ハシタ</sup>ミ<sup>ハシタ</sup>ア<sup>ハシタ</sup>リ<sup>ハシタ</sup>ア<sup>ハシタ</sup>リ<sup>ハシタ</sup>  
サ<sup>ハシタ</sup>ヒ<sup>ハシタ</sup>ミ<sup>ハシタ</sup>ア<sup>ハシタ</sup>リ<sup>ハシタ</sup>ア<sup>ハシタ</sup>リ<sup>ハシタ</sup>

答<sup>ハシタ</sup>

うき<sup>ハシタ</sup>カ

坐てよし也の事マ子 豊能法服  
カリミナリ

ゆき

嘉慶二年十月役者乃す合・後幕  
別会ゆきとどくらむ曲とての  
羽よあくまつゝ一撰集より時され  
てゆきと云羽とまとの羽  
ぬづりゆきと云羽とまとの羽  
左大絶版合羽判ゆきと云  
羽見安の歌とも羽とて座敷行

かう

高麗の合よ後幕別会あづり  
ややん云うと云羽あ  
まくらまくらのひがうめりやう  
一うちまくらめりうりそりくま  
とあづりすとひなよみとひぢ  
たうまくらめりうりそりくま  
まくらめりうりそりくま  
高麗の合よ後幕別会あづり  
かう

15

०६

廣田祐守合兼安二年三月八日  
後承之判云つゝ始終とゆきま  
よくもありややか合達久の年  
五月因て判云つゝの御も少ふるや  
とすとめつよみの御に廣田祐守や  
祐守へよみ百畫守合判云稍ア  
近いとひよはつゝうとひう御  
もよみの御に背く様もひう御

まくらくしやうどひすよとくまく  
せんよつこまくとくわざれこみ  
月のこゑのあ邊の時からをゆふ  
とくわざれ

経序は、今合併なる判決はものゝ勝  
利なりといふのである。左ノアーチ  
後も経序を説く。多くは前と並行して  
書かれてゐる。左ノアーチの後は、  
文保乃の直前よりそれまでの書乃

眼とくの事ありて身も心も逍遙の  
うきいゆふにてこれ

美のうきいゆ  
秋のあきほの  
とすきの葉云々をもとほりてえん  
うるよりひがふると秋の眼のまの  
タヌキあくべくや

美のうきいゆ

あかねを秋叶云々ひづけやあく  
べくやよやかん又日暮を歌叶  
すましと云叶のうきいゆすましと云叶

やうん遠縁ニモ八月空あとの叶り  
すましと云叶と歌ぞして舊そ  
きたりよらかにすましとあとの葉夜  
と云叶といまおきりくわく

また

あかねを合の叶云々たの叶夜未  
セキモトシカアハ

うきいゆ

遠代三年九月あかねを合の叶  
集め合叶云々たの叶夜未セキモトシカアハ

トモセハシテアリシタマニヤトウカニ  
トモセシタムハシタムトウカニモ  
トモセシタムハシタムトウカニモ

トモセ

トモセシタムハシタムトウカニモ  
トモセシタムハシタムトウカニモ  
トモセシタムハシタムトウカニモ  
トモセシタムハシタムトウカニモ  
トモセシタムハシタムトウカニモ  
トモセシタムハシタムトウカニモ

トモセシタムハシタムトウカニモ  
トモセシタムハシタムトウカニモ  
トモセシタムハシタムトウカニモ

トモセ

トモセシタムハシタムトウカニモ  
トモセシタムハシタムトウカニモ  
トモセシタムハシタムトウカニモ  
トモセシタムハシタムトウカニモ  
トモセシタムハシタムトウカニモ  
トモセシタムハシタムトウカニモ

トモセ

トモセ

トモセシタムハシタムトウカニモ  
トモセシタムハシタムトウカニモ  
トモセシタムハシタムトウカニモ

トモセ

トモセ

トモセ

東風がえひらそと云詞とのせ  
からてあらへつてもとてやうこえ  
まきよしてあらううつ羽乃れは  
緋葉形とのせりりとくもふ  
「色とのくもふ

尼  
毛とあさと羽毛をせな東風  
かくすらに化粧散りとくもと  
ゆきまくら入緋葉形とくも  
はははははははははははは

月死とまのくもふ

絆をす合判三月死とまのくも  
ゆきとやうとこ都をまくも

あふふ

吉面裏判云まわりとづかひ不審  
人えうらうけとづかひ又冬が紅潤  
合よるあらわりとづかひとくとくとく  
さきほ

かく

堅國院山面首主あら判えうれの

御事とおどかすあり  
あくま

卷之四

よみ面書手会あつて更度手をさる  
而むむり但此手す合はあつて更  
難をもあつてゆゑをもつてし

馬糞瀧川市合より下云文字  
りふじゆうゆうのひきこみの

卷之三

三

15

承万二年  
辛未都御使  
御三司合  
はるひのす  
よめくらみと  
りもの

ノレハナリハタニキシテシマス  
相手トセラリテシ

月やあく

立場云々の事アリテスヌニハ  
之處

居乃也自の所

主事云々アリマクヤマニシカ

あん

力もやあき

達保立年十二月辛未金メ主事云々判云

ナカヤアモシテシテアリヤマニシカ  
あれや又まと極也

ミヨシ

貞永立年七月園田家主金メ主事

アリシテシテアリヤマニシカ  
人也

貞永立年八月園田家主金メ主事  
人也今ハアモシテシテアリヤマニシカ  
佐也

ミヨシ

六  
卷下

卷六

子の事は御心配な事でござりません。お詫び申す  
御用の事は御心配な事でござりません。お詫び申す  
御用の事は御心配な事でござりません。お詫び申す

御前より承り候事  
御内閣に於て御見付候事

多謝之云はす。まことに此の如きが  
御心なり。

文永二年九月丙寅之列乞奉手書

荒原少しおひるひるたゞくの日とて  
しのうへゆえむあまつともおもつて  
うんはまくちよお魚とてとお魚と

はくとまくらも  
あらわすのむすめと

六百萬中之數或以多至四千萬人也

卷之三

右御内侍の事より

此一卷通之く教序主其地之名書を舊  
母別有之老虎車車木屋也而移東院  
与そ玉之代是

後普光園接取處

嘉慶元年十一月廿二日 雜三辰 判

右御内侍秋陽一徳人連之加書字  
今作一括代座太古極人也教不之  
出宣所耳矣

天正十九年腊月祀四

玄旨羽

